

# 服部宇之吉と中国

——近代日本文学の中国観への影響として——

## 目次

一 はじめに

二 服部宇之吉と中国

三 服部宇之吉の中国観

四 終わりに

丹羽 香

## 一 はじめに

日中の交流関係は時代ごとにさまざまな様相を呈するが、古代においては一貫して先進国中国を日本が学ぶ形態にあった。日本にとって「ほとんど唯一の外国で、しかも圧倒的な高さを持つ文化の源」であった中国は、「外国のもの」として意識するより、普遍的性格を持った、まず受け入れ、学び取るべきものとの意識<sup>(1)</sup>されていたのであり、そのような日本にとって、十九世紀後半からの中国の变革的事態は、自他を認識し、自国の文化を位置づけるに際しての根幹に関わる問題であったはずである。そして、明治期において逆転したともいえる急激な変化を遂げる日本の中国観は、伝統的な漢学・中国観とは異なる次元で築かれることになった。

服部宇之吉は、一八六七（慶応三年）に生まれ、一九三九（昭和十四）年没、明治・大正・昭和にわたって活躍した東洋哲学者として著名である。辞書や古典作品などの監修においては枚挙に暇がないが、中国関連の代表的な著作には、義和団事件に遭遇した時のことを記した『北京籠城日記』や中国哲学の著書『東洋倫理綱要』『儒教と現代思潮』のほか、当時の中国事情を伝える『清国通考』『北京誌』『支那研究』『支那の国民性思想』、その他「支那人の日本に関する感想」「清国の教育に就て」「清国時言」「清国と新文明」などがある<sup>(1)</sup>。これらはその内容が文学的でないということから、たとえば、近年刊行された『幕末明治中国見聞録集成』<sup>(2)</sup>などにも載せられていないが、ハーバード大学日本講座教授・京城帝国大学総長・国学院大学長・東方文化学院院长、そして斯文会・日華学会の運営に直接携わるなど、偉大な業績を持つだけに、後世に与えた影響は大きいと考えなければならない。

伝統的な漢学者とは明らかに異なった中国観を持つことは、先に西洋哲学を学び、その後中国哲学、いわゆる儒教を修めたことにも由来するであろうが、「此の北京籠城（最初の訪中……筆者注）は後年対支文化事業等

に關係する因縁の一となつた」と自身が語るように、生涯三度にわたる、任務を帯びての渡中歴がその形成を促進したと考えられる。そして、東京帝国大学の支那哲学講座の主任教授として、日本における近代中国学の形成に大きく関わりとともに、東宮職御用掛・宮内省御用掛・御購書始漢書進講など、皇族との接触も多かった。「帝国日本からの御用学者」としての印象が強いものの、ある意味客観的な視点を保ったその中国観は、当時の中国事情とともに日本の上層部に伝えられ、日中両国の關係に間接的影響をもたらしたとも考えられる。すくなくとも、近代において新たな中国観が日本人の中に浸透するのに大きな意味を成し、当時の時代背景を根底に置く文化的・文学的コンテクストの形成にとって大きな存在となつたことは確かである。

## 二 服部宇之吉と中国

明治期に実際に渡中し、その際の旅行記を著した文化人として代表的な人物は、以下のようである。<sup>(5)</sup>

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 曾根俊虎『清国漫遊誌』   | 明治六（一八七三）年渡航  |
| 竹添光鴻『棧雲峽雨日記』  | 明治八（一八七五）年渡航  |
| 岡千仞『観光記遊』     | 明治十七（一八八四）年渡航 |
| 田岡嶺雲『戦袍餘塵』    | 明治二三（一八九〇）年渡航 |
| 安東不二雄『支那漫遊実記』 | 明治二四（一八九二）年渡航 |
| 岡倉天心『支那旅行記』   | 明治二六（一八九三）年渡航 |
| 内藤湖南『燕山楚水』    | 明治三二（一八九九）年渡航 |
| 小越平隆『白山黒水録』   | 明治三四（一九〇二）年渡航 |
| 宇野哲人『支那文明記』   | 明治三八（一九〇五）年渡航 |

山川早水「巴蜀」

明治四二（一九〇九）年渡航

夏目漱石『滿韓とところどころ』

明治四二（一九〇九）年渡航

勝田主計『清韓漫遊余瀝』

明治四三（一九一〇）年渡航

しかしながら、実際にはもつと多くの学者・官吏が往来を果たしているのであつて、服部宇之吉もこれらの人々と時期を同じくして渡航したばかりでなく、その任務の性質から一度の渡中期間が長い。また、仕事上の必要から当時の中国において重責にあつた人物たちとの交流も多かつた。<sup>(7)</sup>当然、当代の中国を詳細に、しかも客観的に観察することとなつた。それが新しい時代の、机上のではない中国観を生み出し、また、伝えることになつたのである。

三回にわたる渡中をまとめると、次のようになる。<sup>(8)</sup>

1、明治三十二（一八九九）年九月、文部省より四カ年の留学を命ぜられ、北京に赴く。

（明治三十三年、義和団による北京公使館区域の包囲によつて、籠城を余儀なくされ、同年帰国。ドイツに留学）

2、明治三十五（一九〇二）年八月、京師大学堂師範館総教習として北京へ赴任、明治四十二年まで在職。

3、大正十二年十二月、外務省の対華文化事業調査会委員となり、翌々十四（一九二四）年、他の日本側委員と共に北京へ赴き、中国側委員と協議の上、北京人文科学研究所副総裁に就任。

前述の「此の北京籠城は後年対支文化事業等に関係する因縁の一となつた」という言によれば、最初の渡中の目的はあたかも純然たる留学であつたかのようなのである。また、「自叙」その他の文献にも特に記されていないが、実際には、文部省を経て教育者となり、第三高等中学校の解散および東京高等師範学校の拡張に見せた

手腕を買われて、日清戦争後の来日中国人留学生の増加を背景に、日本人教員を中国に送り、中国人教員の養成機関を設置するにあつたの視察を任務とした、いわばその準備委員としての派遣であつた。

独逸留学は学会当時の仕きたりに過ぎないが、たゞ君の支那留学には若干の事情が伏在した。当時日清戦争の後を承けて我が民間の対支提携運動は頗る活発なるものがあり、又之に応じて支那よりは黄興、胡漢民、汪兆銘、宋教仁等陸統として留学し來つた。此に於て外山正一及び東京女子高等師範学校長矢田部良吉は我が教育界より支那へ人を送り、支那の教育者を養成すべしと主張し、その候補者として君を推し、文部省も之れを容るゝに至つた。但し之は日支両国政府間の交渉を以てせず、従つて君は留学生の名義で支那教育界指導のために渡支することゝなつたのである。<sup>(9)</sup>

留学期間も、当初からドイツ留学を含む四年とされていたのであり、これら三度の渡中は、服部宇之吉の生涯における教育行政官の一面として一貫したものであつて、そこに彼の中国觀の客観性があるといえるであらう。ただし、多くの文化人が記しているように、当時の中国の後れを目のあたりにし、また、反外国感情をも肌で感じたことは確かである。

当時の北京は今の北平とは異なつて、下宿すべき処など全くなかつた。日本人の旅館もなく、住居からが第一困難である。自分は公使館付武官の居られる旧公使館に空室があるので、其処を貸してもらつて居住した。図書館等は無論なく、学校といつても北京大学堂と称するものが一ヶ所あつた位で、必要な書物は悉く自分で購入しなければならず、且排外気分が日一日と高まり行く時で、支那の役人学者等との交際等は思ひもよらぬ時節であつた。<sup>(10)</sup>

着京の翌日公使矢野文雄を訪ふと、矢野は君に『君は誠に悪いときに来た。目下支那人の地位名望ある者は外国人との交際を避けてゐる。紹介はして上げるし、先方も会ふには会ふだらうが、恐らく迷惑がつて到底親密なる交際は出来ないだらう。洵に悪い時勢である』<sup>(11)</sup>

実際の長期滞在は二度目の渡中で、中国初の近代的高等教育機関「北京大学堂」、すなわち「京師大学堂」の拡充（再建）のために「正教習」として貢献する。<sup>(12)</sup>

現北京大学の前身たる京師大学堂は、一八九六年六月、荊部左侍郎李瑞棻によつて上奏され、一八九八年七月、光緒帝の勅命によつて設立される。が、その直後、西太后が政權を掌握したことにより、義和団の乱が起り、八カ国連合軍が北京を占領、混乱の中有名無実の時期が続いていた。一九〇二年十二月に正式に再開される際に「日本教習」が関与することになる。京師大学堂には師範館（教員養成学校）と仕学館（官吏養成学校）が設置され、服部宇之吉は師範館の唯一の「正教習」として招かれたのである。

当時の様子は、「服部先生追悼録」中の「北京大学堂と父」にも詳しく書かれている。

此の頃清国教育の実権は一に米国の手に握られ、有名なるドクトル・マルチンは此のカレッヂ（俗に北京大学と称した）の長老として支那教育界に臨んでゐた。然るに其後北清事変起りて外人の勢力一時に失墜し、ドクトル・マルチンのカレッヂも乱治りて後猶依然閉鎖休校の状態に在つた。此の時に当り我が外相小村寿太郎氏は清国教育の実権は欧米に委ぬべきものと考へられ、時の駐清公使内田康哉氏亦た其の意を受け、軍機大臣慶親王・同じく嬰鴻機の権勢家（軍機大臣の定員は一人に非ず、詳細は清国通考に見ゆ）を直接相手として話を進め、遂に清朝を説服して明治三十五年頃に入り教育の実権は一切日本に委任すること、なさしめた。蓋し小村侯は東亜の大勢殊に支那の前途を憂へて支那人の精神を日本人の精神に依つて改造し以

て当時既に支那全土に亙つて起り来れる倒滿興漢の氣勢を挫きて清朝を擁護し延いて日本の国運進展に資せんとの遠大なる着想から支那の教育を新たに日本の手に依つて改革しやうと決意され、茲に支那教育の最高実権は日本に移つて来たのである。明治三十五年に到り兩國政府間に議纏り日本の学者を招聘して北京大学堂を開くことに決した。<sup>(13)</sup>

黄濟氏は、中国の近代教育制度史を、二十世紀初頭から五四運動まで、五四運動から中華人民共和国成立まで、中華人民共和国成立から文化大革命終結まで、そしてその後から現在まで、と歴史を重視した四つの時期に分けて<sup>(14)</sup>いる。実際にはそれ以前に諸外国に学ばんと外国語学校を設立した時期がある。京師同文館（一八六二年）や上海広方言館（一八六三年）<sup>(15)</sup>がそれである。この点については後述する服部宇之吉の觀察および分析が極めて的確であると考ええる。ここではあえて中国の近代教育と日本の国情との關係に言及するのみとする。

傍線を施したように、十九世紀末のこのような時代と情況下において服部宇之吉の教員としての生涯および中国との關係が始まったことは殊に注視しなければならない。彼の中国觀および思想（後の儒教国教化問題）は、日清戦争後の列強の一つとして中国と相對しようとする日本の国体を背景としていたのである。一八九六年九月に提出された京師大学堂設立の具体的構想には、日本のように「国学」を捨てて西洋を学ぶことのないようにという項目が第一に書かれているが、中国側のこのような意図に関して、現在のところ服部宇之吉の言を見つけれないでいる。

一日宗旨宜先定也。中国五千年來、聖神相繼、政教昌明、決不能如日本之舍己艺人、尽弃其学而学西法。今中国京師創立大学堂、自应以中学为主、西学为辅、中学为体、西学为用、中学有未备者、以西学补之、中学有失传者、以西学还之。以中学包罗西学、不能以西学凌驾中学。此是立学宗旨。日后分科设教、及推

広各省、一切均抱抱定此意、千变万化、语不理宗。至办理章程、有必应变通尽利者、亦不得拘泥迹象、局守成规、致失因时制宜之妙。(孫家鼐「议复开办京师大学堂折」)<sup>(16)</sup>

京師大学堂の再建内容については、大塚豊氏の「中国近代高等師範教育の萌芽と服部宇之吉」<sup>(17)</sup>がその詳細に及んでいる。中国における近代学制が日本との密接な関係の中で築かれ、そこに服部宇之吉の力が尽くされたことは確かである。

### 三 服部宇之吉の中国観

日本をインド文明・中国文明の地理的最終撰取者とする文明論的な日本の位置づけは、『東洋の理想』などの著書によって、早くは岡倉天心によって提唱されているが、近代世界における日本は、自身を東西文明を最良の形で融合させ、再構築させたと位置づける。<sup>(18)</sup>

……父はかねて支那人の教育には日本が当たらなければならぬと云ふ主張を持ち濱尾先生など、も論じてゐたらしいが、此の持説は又自ら小村外相の所信と期せずして一致し、……(大学の)幹部たるものは当然支那人で而も日本で教育を受けた人手なければならぬと云ふ計画の下に父自ら学校章程を定めて政府をして発布せしめ(これが又各省の学制の模範となつた)、日本は支那人教授の生産地と云ふことにした。<sup>(19)</sup>

「支那人教授の生産地」とは、『統対支回顧録』にあるように「今日の第一高等学校特設予科」を指している。<sup>(8)</sup>



義和団事件の最終議定書調印者小村寿太郎は、一政治家として、「東亜の大勢殊に支那の前途を憂へて支那人の精神を日本人の精神に依つて改造し以て当時既に支那全土に互つて起り来れる倒滿興漢の氣勢を挫きて清朝を擁護し延いて日本の国運進展に資せん」という明確な目論見をもつて臨む。しかし、息子服部武のいう「期せずして」の意図がいかなるものかはわからないが、官僚出身で、一見「帝国からの御用学者」然と見える服部宇之吉が、国益優先の構想で大学堂の建設にあたつていたとはいえないであろう。

国家を濟ふの途は教育の改善に依りて人材を育成するの外にはないといふので、新教育の施設といふことに上下の意見が一致した。さて、それを実施するに就いては、泰西の文物を採り之を同化して東洋風にした日本を学ぶのが最も捷徑であるといふので、日本から先生を招き、日本に留学生を出すことにしたのであります。当時の清国人は日本を学ぶについては、日本の現在は高すぎるので、先づ大體明治初年の日本を学ぼうとしたのであつた。<sup>(20)</sup>

服部宇之吉は、先進国家日本が後進の国を救済する方法としての教育を主張する。

此れも亦明治初年の日本の制度に学んで、北京大学堂は支那の新教育の全般を掌る処とし、北京大学堂の長官を官学大臣と称し、北京大学堂内に事務所を設け夫々の機関を設備した。自分等は官学大臣との契約に依つて総教習又は教習として就職したのである。新教育について何等知識のない官学大臣以下の人々が自分の着任を待ち受けて居つたので、着任早々毎日出勤して、北京大学堂師範仕学兩館の学科課程、諸規則類等を制定し、教室、実験室、寄宿舎等の設備を為し、機械標本、圖書の購入を為し、師範館の為には入学試験の<sup>(21)</sup> 手続をとり等して、愈々同年十月末に開館した次第であります。

大学堂を将来総合大学とするに肝要な問題は教授の人選であります。少くとも根幹的な講座を担当する教授は支那人でなければ支那の大学として価値なく、又眞の發達も望めない。そこで総合大学とするに先立ち、先づ大学教授たるべき者を支那の人の中から養成することが、先決問題であると信じ、管学大臣張百熙に反覆説明し、遂にその同意を得ました。仍て師範館、仕学館の両方から学生三十四名を選抜して、之に将来大学教授として担当すべき学科を各人毎に指定して学習せしむる事とし、この指定は堅く守つて變改を許さぬ事にしました。そして差し当り、之を日本に留学させねばならぬので、その取扱ひに付き日本政府当局、東大総長等に交渉し、特別の庇護指導の下に各々その目的を遂げしめる手段を依頼したのであります。

初回の渡中は目的半ばにして帰国した服部宇之吉は、近代国家日本から派遣された使命に自負をもつて、京師大学堂の本格的發足に苦心、奔走したのではないか。

当時の北京は籠城前の北京とは雲泥の相違で、朝野上下相率いて革新に是れ努めた。北清事變の終りに連合軍が北京を陥れ、両宮は西安に蒙塵せられた。該地に於て国の将来に就いて色々大臣連と相談された。過去に於て欧米又は日本の威力の大なるに感じて自覚した場合もあつたが、その自覚たるや問題の根本には徹底し得なかつた。が、今度といふ今度は余程深刻に自覚が促され、国家を濟ふの途は教育の改善に依りて人材を育成するの外にはないといふので、新教育の施設といふことに上下の意見が一致した。

服部宇之吉の文章には、「自覚」「覚醒」という語が多く登場する。ここでいう「今度といふ今度」については「対支回顧録」にある「眞の覚醒」時を指す。

一体支那の頑冥と革新といふ事に就て、私は左の如く三段階に分けて見ておます。……英仏連合軍が北京に侵入した時、支那は先づ第一期的に覚醒をやりました。……第二回の覚醒は、日清戦争の結果であります。……かゝる折柄、膠州湾や威海衛を取られた地元の山東省に義和団といふものが起り、滅洋扶清を標語に人身を剝削し、その勢ひ猖獗を極めました。……この拳匪の乱に西安府に蒙塵した西太后は、日夜群臣を集めて、国家の将来に就て真剣に協議を重ね、其結果支那は初めて真の覚醒に到達したのであります。

救済の最短コースとして日本を学ばせる、優れた日本が教化する、というこの時代の文化意識も、いわば服部流の客観性で、中国および日中の関係を冷静に観察、分析し、進んだ文化と知識をもった人材、教育者を育成することが今の中国には最重要であるとの思想に基づいて、中国教育界の改革にあつた、その実践にこそ他のものと異なつた、淡々とした中国観が表れているのではないだろうか。

#### 四 終わりに

服部宇之吉は、明治四十二年一月に帰国するまで、約六年半にわたり、哲学・教育学・心理学等を担当するが、帰国に際し、中国政府から正式に他教員とは別格の表彰を受けるなど、その貢献は中国側からも高く評価されている。

京師大学堂法政堂日本教員五年期満清賞給宝星折（光緒三十四年三月、四月初一）

秦为京師大学堂法政堂日本教員五年期満期，拟请赏宝星，以示鼓励，恭折仰祈圣鉴事。窃准京師大学堂  
 总监督咨称，本学堂正教员 日本文学博士服部宇之吉，授课勤劬，成材甚众。来堂业已五年，仕学师范

两馆毕业学生共计一百零四人、洵属异常出力、咨明奏请赏给宝星。

また、義和団賠償金の返還分を財源に日本が始めた「対支文化事業（北京に人文科学研究所と図書館、上海に自然科学研究所などを設置、運営）」の実施に際し、外務省から調査会委員を委託され、北京人文科学研究所の副総裁に就任した服部宇之吉は、他の日本側委員と共に十五年ぶりに北京へ赴くが、教え子に教壇に立つたものが少ないことを「遺憾である」とはいうものの、あちこちで恩師として迎えられる。

到る処の地で旧門生即ち往年北京大学堂で教育した人々が夫々枢要の位置を占めて居るのに送迎せられ、懐旧談をなし、将来の希望を述べたりして、非常に愉快であった。殊に北京では多数の旧門生と会見し、旧大<sup>(25)</sup>学堂で事を同じくした役人にも会見した。到る処で英語又は支那語で講演をしました。

「東文分教習」として宇之吉の講義を半年に渡って通訳をした範源濂は、三回目の渡中である大正十四年（一九二四）当時には北京師範大学校長となつて歓待の辞を述べている。<sup>(26)</sup>

然し何分最初の試みであつたので、趣旨も十分徹底せず、学校当局及び学生の苦心に反して予期の実績は挙げられませんでした。前記三十四名中、今日迄に実際に教授として活動した人は甚だ少数で、洵に遺憾でありま<sup>(27)</sup>す。

服部宇之吉と中国との関係については、その業績に比してほんの数本の論文があるばかりであるが、当時の一般の漢学者が現実の中国を直視し、自身の観念の中に受け入れることをしなかつたのに対して、ありのまま

を客観的に認め、さらに、その実態を冷静に判断し分析してみせ、言語に変えて伝えようとした一帝国大学の支那学者としての姿勢は、もっと強調されてよいと思う。教育行政官的性格の強い教学歴ではあるものの、第一義的に教育者として従事する真摯な精神があると考ええる。

- (1) 『東京大学漢学会雑誌』掲載の著作目録が最も詳しい。
- (2) 小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』（一九九七年 ゆまに書房）
- (3) 服部先生古稀祝賀記念論文集刊行会編『服部先生古稀祝賀記念論文集』（昭和十一年 富山房）十五頁「服部先生自叙」
- (4) 子安宣邦「近代中国と孔子教——孔教国教化問題と中国認識」四四六頁
- (5) 嚴紹溟『中日古代文学関係史稿』（一九八七年 湖南文艺出版社）、「幕末明治中国見聞録集成」等参照
- (6) 汪向荣『日本教習』（一九八八年 生活・読書・新知三聯書店）の統計によれば、明治二十三年（一八九〇）には八百六十三人、明治三十二年（一八九九）には千七百二十五人、大正六年（一九一六）には十万四千二百七十五人の日本人が在中した。
- (7) 東亜同文会編『統対支回顧録（下巻）』（昭和四十八年 原書房）七四五頁「北京に着いて幾何もなく、矢野公使が李鴻章初め軍機大臣以下の支那大官を招いで盛宴を張り、私も列席して種々の人に紹介されました」
- (8) 山根幸夫「服部字之吉と中国」等参照
- (9) 『統対支回顧録（下巻）』七四四頁
- (10) 『服部先生古稀祝賀記念論文集』十三頁
- (11) 『統対支回顧録（下巻）』七四五頁
- (12) 服部武「北京大学堂と父」（『東京大学漢学会雑誌』七一三 昭和十四年11月）一二四頁「抑々北京大学堂（官称は京師大学、インベリアル・ユニヴァーシティ北京に在るを以て俗に北京大学堂と云ひ殊に外人は専ら此の名を用ひた）は其の前身と見るべきものが既に康有為が一時権勢を振るつた時代に一種アメリカ風のカレッヂとして開設されてあつた」
- (13) 『東京大学漢学会雑誌』七一三 一二五頁（傍線は筆者）

- (14) 黄済「中国近百年教育思想回眸」(『北京大学教育評論』二〇〇三年 第二期 五、十一頁)
- (15) 陳学遵主編「中国近代教育史教学參考資料」(一九八六年 人民教育出版社)等参照
- (16) 北京大学校史研究室編「北京大学史料」第一卷(一九九三年 北京大学出版社) 二二三頁(傍線は筆者)
- (17) 「国立教育研究所紀要」一九八八年三月
- (18) 子安宣邦「近代中国と日本と孔子教——孔教国教化問題と中国認識」等参照
- (19) 「東京大学漢学会雑誌」七一三 一二五頁(傍線は筆者)
- (20) 「服部先生古稀祝賀記念論文集」 十七頁
- (21) 「服部先生古稀祝賀記念論文集」 十八頁
- (22) 「对支回顧録(下卷)」七四七—七四八頁
- (23) 「服部先生古稀祝賀記念論文集」 十八頁
- (24) 「統对支回顧録」 七四五—七四六頁
- (25) 「服部先生古稀祝賀記念論文集」 二五頁
- (26) 黎難秋「中国口訳史」(二〇〇二年 青島出版社) 三〇七頁等
- (27) 「对支回顧録(下卷)」 七四八頁